

非暴力と反軍の九条

(17) 古沢 宣慶

私は九条の会市川に所属していて、毎年5月3日、J R下総中山駅頭情宣に参加している。何を言っても自由(と私は勝手に解釈)なので、「九条実現!」「自衛隊解体!」「日米安保廃棄!」「非武装・非暴力の世界を!」と叫び続けている。若者が「あの坊さんはラディカルだ」と言ったそうだ。「根本的な」という意味で、私はラディカルである。同じ意味でファンタメンタルでもありたい。

「尖閣」をどうする?と言ってくる人が多い。あくまでも言葉と論理でもって中国を説得すべきだ、というのが私の答えだ。中国が力づくできたらどうする?あくまでも説得を続けるだけだ。それで上手く行くのか?それはわからないが、言葉と真心での説得を続けるしかない。それが、非武装・非暴力を選んだ者の闘いの道だ。この辺で、相手の方があきれて引き上げてしまう。

現実の中国のやり口を見てみると、誠意ある説得の道は困難だと思うが、「九条実現」非武装・非暴力」を主張する以上、「とにかく説得を」しか道はない。

モンテニユは、非武装・非暴力の人ではないし、むしろ彼なりのやり方で主権国家樹立に協力・貢献した。九条など思いつけるような時代ではないから、それは仕方がない。

徹底した暴力否定思想を根拠に、クエーカー派が主権国家に対峙したのは、次の17世紀である。非武装・非暴力を志向する者が学ぶべきなのは、「彼なりのやり方」である。

「非・非暴力主義者」を何と呼べば良いのだろうか? 「暴力主義者」と言うのは失礼のようにだし、実態からもかけ離れている。暴力を肯定するからといって、年がら年中暴力を「実践」しているわけではない。当人の主観においては、どうしても暴力抵抗が必要な場合があると考えている人たちである。軽々しく「非暴力」を口にするが、肝心な時に逃げるか手を出すかの者たちよりも、はるかに冷静・沈着であり、日常の行動はきわめて非暴力的である。現実信用して付き合ひ、安心して行動を共にできるのは、むしろこういった「暴力抵抗肯定者」たちである。

暴力・非暴力の区分けはもろろん大切で、私自身はあくまでも「非暴力」にこだわりたい。けるつもりだが、現実の人間関係においては、その人に誠意があるか、信頼できるかの方が、暴力か非暴力かよりも大事である。そういった視点から、『エセー』を読み、堀田善衛が伝えるモンテニユの活動を見て行きたい。

「信頼を示せば、しばしば相手の信頼が返ってくる」という、ティトウス・リウイス『ローマ建国史』からの引用がある。そして、「恐

怖や不信は、攻撃を招いて、それと結託するものだ」と言い添える。ここから直ちに思い浮かぶのは、日本国憲法前文の次の一節である。

「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。」(傍点引用)

このような「信頼」は「甘い」のだろうか。しかし、よく考えてもらいたい。モンテニユはこの言葉を、あの宗教争乱の渦中で用いているのだ。しかも彼は、この言葉に忠実に仲介者として行動し、争乱を収めようと努めた。さらに「信頼醸成」なる言葉は、武装肯定の「集団安全保障」構築にも存するものである。EUは今ガタガタだし、EU限定の「集団安全保障」にはEUエゴイズムが感じられるし、域外に空爆はするし、そもそも「集団安全保障」はグローバル・レベルでしか成り立たないと思うのだが、お互いの胸襟を開いての「信頼醸成」から全てが始まることを、EUの事例は明らかにしている。

まず相手を信頼してかかる、この「甘さ」こそ平和への第一歩である。であるならば、とりあえず軍拡への衝動を抑え、「安全保障のディレンマ」の道から抜け出すことが、武装肯定者も認めざるをえない、「平和」に向けて現実的対応だろう。

それが弱さ故の選択ではなく、理想主義に

よるものであることを、九条こそが証明する。

以下はマキアヴェリ批判である。

「われわれの時代にも、君主の義務を論じるにあたって、もっぱら国事の利益を重視して、これを信義とか良心よりも優先する著作家がいるけれど、こうした考え方は、運命のおかげにより、たった一度約束を破っただけで、たまたま国事がうまくいって、これを安定させることができた君主に關してならば、それなりに有効であるのかもしれない。けれども、ものごとはそううまく運ぶわけではない。「中略」この最初の利益が、それに続いて、果てしない損害を引き起こすことになる。この不実が前例となつてしまい、この君主は、あらゆる取引から排除されて、交渉手段を奪われるのだ。」

政治というものの現実がどのようなものであるかを明らかにしたことで、マキアヴェリは「近代政治学の祖」と評価されている。政治に携わる者が、時には不道德な手段を用いても、当人が「まっとうな目的」と考える事柄を達成するのが政治だ、というのはその通りだろう。例えば、その目的が「統一国家」の建設による「平和と秩序」の確保であるならば、その限りに於いて手段を選ばないというのが、マキアヴェリの指摘する政治である。私などは、そして九条の立場では、そのよう

な「政治」観を自明のものとしてしまうことに最初の誤りを見てしまうのだが、ここは百歩譲って、「政治」とはそのようなものだとしておこう。そうであったとしても、マキアヴェリの理論が無条件で通用しないことの反証として、モンテーニュは、オスマン・トルコのスレイマン大帝の言葉を挙げる。

「余はこの地において、他にもつと大規模な遠征を計画しているのであるから、この不実なふるまいは、たとえ現時点では役立つかに思われても、将来的には、不評や不信の念を招き、大変な不利益となるであろう。」

相手があることだから、「信頼」のみを掲げたの対外交渉だけで現実の政治が上手く運ぶとは思わないが、短期的には「甘い」と思われることが長期的には真の利益となることもまた確かである。「現実政治」の名のもとに九条の「甘い」理念を見くびる者は、本当の政治を全うすることができないのではないか。

マキアヴェリズムのモデルとなつたヴァレンティーノ公(チェーザレ・ボルジア)の没落は、「不運」ですまされるものだろうか？

モンテーニュ自身の記述は、政治の方に向かわず、自分自身の生き方を語ることになる。そして、堀田によれば、この生き方こそが、交渉仲介者として貴重な資質なのだ。

「ところで、このわたしだが、阿諛追従や二枚舌の人間になるぐらいなら、うるさ

型で無遠慮な人間であるほうがまだましだ。わたしがこのように、他人のことには頓着せず、自分のありのままをすっかり開けつぽろげにしていることのうち、高慢さや強情さがいくぶんか混じっていることは認める。それに、どうやらわたしは、本当ならばもつとかしこまるべきときに、自由気ままにふるまい敬意に対する反発からかつとむきになって突つかかるところもあるらしい。さらには、どうも小細工が苦手で、自分の気性にひきずられるきらいがある。「中略」こうした次第ゆえ、わたしは、自分の気質のみならず、自分の理屈からも、自然の流れに身をゆだねて、いつでも思っていることを口に出して、その結果は運を天に任せることにしている。そういえば、アリストテッポスが、哲学という樹木から得られる主たる果実は、だれが相手でも、自由に、素直に話せることだと述べていた。」

一言でいえばモンテーニュは、権謀術数とは全く無縁の人間であった。

もちろん、綺麗ごとだけで政治はできない。モンテーニュも「役立つことと正しいことを区別する」必要性を認めている。しかし、「有効な行為であるならば、その行為は、各人とつて正しいのだと考えて、結論をくだすとしたら、それはまちがいである。」

(ふるさわ・せんけい／日蓮宗浄鏡寺住職)